

Title	生成変形文法と文体論
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外国語大学学報. 56 p.17-p.29
Issue Date	1982-03-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80879">https://hdl.handle.net/11094/80879</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 生成変形文法と文体論

舟 阪 晃

### GENERATIVE TRANSFORMATIONAL GRAMMAR AND STYLISTICS

Akira FUNASAKA

In this paper some problems concerning Stylistics are discussed in the framework of generative transformational grammar. Stylistics in linguistic competence model and that in linguistic performance are distinguished. In the former the status of stylistic component and characteristics of stylistic rules are discussed and Overlap Deletion, Technique Deletion and Scrambling Rule (with proviso) are recognized as stylistic rules. In the latter all the optional rules, independently of such differences as stylistic rules and grammatical ones or PS-rules and transformational ones, can be factors which bring about stylistic effect on a sentence. It is suggested that a probability model is needed to describe patterns of the choice of them.

#### 〇. まえがき

本稿の目的は、生成変形文法の枠組みの中での文体論に関する問題点を議論することである。言語知識 (Linguistic competence) の一部としての文体論と、言語運用 (Linguistic performance) の一部としてのそれとが区別される。前者については、文法的規則とのちがいに注意しながら、文体規則の特徴の一部が明らかにされる。後者については、言語運用モデルの一部として文体論が位置づけられる。すべての随意的規則は、文体発生の要因になりうるが、その選択パタンの記述のために Probability モデルの必要が指摘される。

#### 1. 基本的概念

最近、生成変形文法関係の文献の中に、文体論についての言及が散見されるようになってきたが、筆者は、ちょうど10年前に、「言語学的文体論」<sup>①</sup>という題目で小論を書いた。本稿では、まず、その論点を要約し、議論の出発点としたい。

### 1.1. 文体的直観 (Stylistic intuition)

言語使用者には、文法的直観を含む言語的直観が備っているといわれているが、さらに、いわば文体的直観とよばれるべきものも備っているということが指摘されねばならない。伝達行為の際、われわれは、ほとんど無意識的に、その場に適した文体を選択し、伝達内容を信号化 (encode) している。一方、信号の受け手の方も、与えられた発話の伝達内容ばかりでなく、その文体的な特徴をも解釈 (decode) し、適切な反応をフィードバックすることにより、伝達行為を完成させている。文体研究は、文体的直観の要因、特徴、機能等を、できるだけ形式的に、検証可能な方法で、考察しなければならない。

### 1.2. 言語知識と言語運用の区別

言語知識は、“idealized speaker-hearer” の言語知識を記述するのを目標としているのであるから、すべての可能な言語表現を説明しなければならない。この意味で、言語知識は、possibility の世界に属するといえる。一方、言語運用は、言語使用者が実際の伝達行為に参加したときに、彼の “internalized grammar” をどのように使用するかということに注意を向ける分野であり、いわば、probability の世界であるといえる。つまり、可能な表現のうち、どれが選択されたか、逆にいうならば、どれが捨てられたか、を問題にする分野である。

言語知識の分野では、ある規則、たとえば、ある変形規則の適用の可否は、問題の構造の分析可能性 (analyzability) に依存しているので、原則として、“Yes or No” で答が出るはずであるが、言語運用面では、種々の要因が複雑にからまっているために、その考察は非常に困難な側面をもっている。しかし、このことは、言語運用は、形式的に、また、検証可能な方法で研究することができないということを意味しない。たとえば、言葉のいいまちがいという現象の中にも一定の規則性がある<sup>②</sup>ことを考えるだけで十分であろう。

### 1.3. 文体とは選択のこと

文体とは、可能な構造や規則の選択パターンであるといえよう。素朴ないい方をすれば、信号の送り手は、受け手に伝えるべき伝達内容にふさわしいいくつかの表現の中から一つだけを選択し、その他の表現はすべて捨てねばならない。一方、受け手の方は、送り手が選択した信号から、また同時に、他の表現を捨てたという事実から、ある種の「意味」を感じとることになる。さらに、選択ということを一歩進めて考えてみると、言語的な行為を行うことがすでに一つの選択の結果であるということに気がつく。なぜなら、身振 (gesture) 視線 (eye-direction), 姿勢 (posture) などの非言語的伝達手段を用いることによって、言語的な行為で意図した内容を相手に伝えることが可能なことがあるからである。伝達という広い分野から、この問題を考察するのは興味があるが、本稿の主題からは逸脱することになる。

さて、「文体とは選択のこと」という考え方にたつと、必然的に、すべての発話には文体があるという広義の文体論に到着する。一方、特殊な効果を生み出す表現のみに文体があるという考え方もあるが、これは、いわば、狭義の文体論といえよう。筆者は、狭義の文体論は広義のそれ

の中に含まれるものと考えている。

#### 1.4. 文体のレベル

上のような考え方にたつ場合、文体は一つのレベルからなるのではなく、すくなくとも、(1)に上げるとく、いくつかの下位分類からなると考えた方がよい。

(1)(i) 自然言語の文体

(ii) 特定言語の文体

(iii) 集合文体

(iv) 個人文体

(1 i)では、人間の短時間記憶能力の限界や知覚の方法 (Perceptual strategy) の制限などにより生じる選択の probability の濃淡が問題にされる。(1 ii)では、特定言語の特徴に左右される選択の probability の濃淡が問題にされる。たとえば、英語では右枝 (right-branching) 構造は、文処理 (Sentence processing) 上一番楽な、したがって使用頻度の高い構造であるという記述はこのレベルに属している。(1 iii)では、「口語の文体」、「詩の文体」などのように、人間の集合が同一条件下におかれたときに選択しやすいパタンが扱われる。(1 iv)は、説明は不要であろう。

### 2. 文体論についての二つの考え方

生成変形文法の枠組みの中でこれまでに言及された文体論には二種類がある。一つは、Ohmann(64)に代表されるモデルで、文法規則、なかでも、変形規則の選択使用に文体発生の要因を求めるものであり、文体論は言語運用の一部とみなされており、広義の文体論といえよう。他方は、狭義の文体論で、文体論を言語知識の中に位置づけ、統語部門や意味部門などと同じような地位をもつ文体部門 (Stylistic component) を認めようとするものである。最近の生成変形文法関係の文献には、後者の立場をとるものが多い。次節では、まず、後者の立場を検討することにしよう。

#### 2.1. 言語知識の一部としての文体論

文体を生み出す要因は、文法的な構造や規則の選択のしかたではなく、「文体規則」そのものの選択である。そして、その規則は、文体部門の中に収容されている。

##### 2.1.1. 文体部門という概念

文体部門——人によっては修辞部門 (Rhetorical component) ——についての言及は、Ross (67), Katz(72), Grinder-Elgin(73)その他にみられるが、文体部門を文法の枠組みの中に明示的に位置づけた最初のものとして Grinder-Elgin(73)が注目されよう。Grinder-Elgin によれば、文学的言語も普通の言語も、同じ音韻、語彙、統語規則を用いているのであるから、両者は、広い意味での言語学の分野に入るべきものである。一方、文学的言語、とくに、詩的言語は、普通の言語とはちがった特徴をもっている。たとえば、詩的言語には、(i)普通の言語からの逸脱があり、(ii)普通の言語にない特徴があり、さらに(iii)パラフレーズできない性質がある (Grinder-Elgin 73: 170-2)。このような特徴は、これまでの文法規則を拡大・修正することによって説明しきれな

いものである。

たとえば、

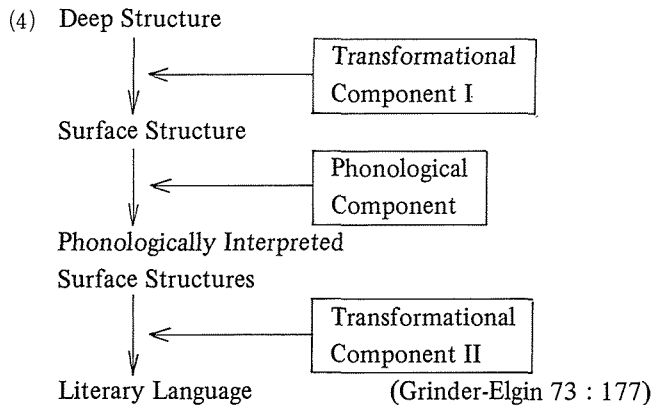
- (2) (i) He danced his dance.
- (ii) He danced his did.
- (iii) He danced his paper bag.

(Grinder-Elgin 73: 173)

(2 i)は問題はない。(2 ii)は、カミングスの詩の一部であり、筆者にはこのような表現の必要性が理解できないが、英語を母国語とする人々には何らかのイメージが生じるものと想像される。一方、(2 iii)は、範疇の連続としては、(2 ii)よりはるかによい構造であるが、ナンセンスな文となる。普通の文法を修正し、(2 ii)も派生するような規則を考えるとすれば、(3)のような規則が必要となり、その結果、文法内に大きな混乱が生じることになる。

- (3)  $VP \rightarrow V + Det + V$

Grinder-Elgin は、このような考察を踏まえて、(4)にみられるごとく、文体部門として「変形部門Ⅱ」を提案した。



変形部門Ⅱはすべて随意的な変形からなり、それが選択されたときには、出力として文学的な表現が生じることになる。(4)は、言語知識を説明するための機構であるから、必然的に、変形部門Ⅱは、言語運用ではなく、言語知識の面に属していることになる。どのような規則が、この部門に入るかは大きな問題であるが、Grinder-Elgin はかなり特殊な規則のみを考えているようで、大部分の「普通」の発話には文体がないといわざるをえなくなりそうである。また、変形部門Ⅱへの入力「普通」の発話であるはずであるが、その場合、(2 ii)の構造を出力する入力はどのような形をしているのか、問題が残るところである。

一方、Chomsky(80)や Chomsky-Lasnik(77)でも、文体規則の位置づけが行われているが、筆者の理解する限りでは、この規則は言語知識の説明の一部をなすものと考えられる。しかし、Chomsky(65:127)では、断定的ではないが、文体的な倒置規則は、文法的規則というよりは、むしろ言語運用面の規則であるとしており、この種の規則の微妙な立場を浮彫りにしている。筆

者の立場でいうならば、文体発生の要因は、言語知識と言語運用の両面に求められるべきである。

最後に、Ross(67)やKatz(72)では、文体部門という用語は用いられているが、文法の枠組みの中での明白な位置づけは行われてなく、どちらかといえば、「がっさい」(catch-all)部門として扱われているようである。

## 2.1.2. 文体規則の特徴

文体規則については、各人がそれぞれイメージをもっているようであるが、その特徴を明白にしようとすると、それが非常に困難な仕事であることがわかる。本節では、Chomsky(65), Emonds(76), Banfield(81)などに散見される文体的な条件を集め、文体規則の最大公約数を求めてみたい。

(5) 文体規則は、

- (i) すべて随意的である。
- (ii) 文法的規則のすべてに従う。
- (iii) 表層構造を入力とする。
- (iv) 出力の容認性を低下させる。
- (v) 文法的制約(数・格の一致、再帰代名詞や相互代名詞の同一性など)を維持する。
- (vi) 構造要素の節点の変更(relabeling)、構造の変更(regrouping)を生じない。
- (vii) 特定の形態素を導入することはない。
- (viii) 特定の形態素を引き金(trigger)としない。
- (ix) 同一性以外の削除は行わない。
- (x) 構成要素の境界を無視して適用可能である。
- (xi) 構造保持の制約を破ることがあるが、その限界はつぎの二つである：①表層構造の関係が不明にならないこと。②あいまいさを生じないこと。
- (xii) 痕跡を生じない。

以上の特徴を検討しながら、まとめてみると(6)のようになろう。

(6) 文体規則は、

- (i) すべて随意的である。[(5 i);(5viii)]
- (ii) 表層構造を入力とし、出力の容認性を低下させる。[(5 iii);(5iv)]
- (iii) 文法規則で規定された文法関係、共起関係を維持する。一見維持されていないように見えても、正しく推測、決定が可能である。[(5 ii);(5 v);(5 vi);(5vii);(5 ix);(5xii)]
- (iv) 文法の枠組みの中では扱えない現象を扱う[(5 x);(5xi)]

(6 i)は、文体規則の特徴の一つにすぎないのであって、その逆はかならずしも真でない。(6 ii)については、容認性の評価が人により変動することが考えられ、問題が残る点である。しかし、入力と出力とでは文体的な差があることは指摘できよう。(6 iii)の文法関係、共起関係の推測、

決定には、音韻論、語彙論、統語論、意味論、の他に文脈や場の情報、場合によっては、常識までもが動員されることになる。 (6iv)は、文法とはちがった新しい分野を設定するときの積極的な根拠となるもので、もし、すべての文体的現象が文法内で処理できるなら、新しい部門を設ける必要はなくなるわけである。

### 2.1.3. 文体規則の実例

これまでに「文体規則」という名称で呼ばれたことのあるいくつかの規則をとり上げ、どういう意味で文体的なのか、また、本当にその名称に価するのかどうか、を検討してみよう。

#### 2.1.3.1. 重複削除 (Overlap deletion)

(7) (i) Within the context of poetic language, if a given sequence  $S_i$  is followed immediately by another sequence  $S_i'$ , delete  $S_i'$ , where

- ①  $S_i$  and  $S_i'$  are phonologically identical
- ②  $S_i$  and  $S_i'$  share the same lexical reading
- ③  $S_i$  and  $S_i'$  are dominated by separate S-nodes at the time Overlap Deletion applies. (Grinder-Elgin 73:180)
- ④  $S_i$  and  $S_i'$  are immediately contiguous. (*Ibid.* 178-179)

(ii) ... the ocean wanders the streets are so ancient (Cummings: "There is a here and")

(iii) オソレイリヤノキシボジン [恐れ入る：入谷の鬼子母神]

(iv) ドウニモナラナイウラノカキノキ [どうにもならない：(実が)ならない裏の柿の木]

(v) ムヨクノショウリキマッタロウ [無欲の勝利：正力松太郎]

(7 ii) – (7 v) の下線部は、重複削除の結果であると説明できるが、英語の場合、この種の縮約された (compressed) 表現は、詩的な効果を与えるといわれている。日本語の場合は、(7 i ②)(7 i ④)の条件に違反しているにもかかわらず容認できるので、この規則の適用条件は、英語の場合よりも緩いといえる。その効果は「戯言的」といってよい。

この規則は、これまでの文法規則では許されることのない削除を行っており、もし、これを文法の中に入れると、文法内部に混乱を生じることになる。(6)として上げた条件と照合してみると、この規則はすべての条件を満しているので、「文体的」と呼ぶことは無難なように思える。

#### 2.1.3.2. 技巧的削除 (Technique deletion)

(8) (i) Where a lexical item (a) is one of a small finite set of possible items, and (b) can be reinforced in the Surface Structure by such technical devices as rhyme, assonance and alliteration, and meter, that lexical item may be deleted from the surface string of poetic language.

(ii) this small horse newly

he is fresh from his mother's flanks

(iii) snowflakes round and round through air

(Grinder-Elgin 73:182-183)

この規則は、(8 ii)(8 iii)の実例で明らかなように、統語的に、復元可能性 (recoverability) に違反する削除を行っており、いわゆる文法規則とは考えられないものである。しかし、英語使用者の言語知識を動員すれば、その復元はまったく不可能とはいえない。(6)の条件と照合すれば、この規則も、重複削除と同じく、文体規則の一つといえよう。さらに、復元に際しては、単語の音形が重要な手掛りになるので、(4)における変形部門Ⅱの位置は妥当なものといえよう。

#### 2.1.3.3. “he danced his did”の場合

(2 ii)の例文は(9)の最後の行に由来している。

(9) anyone lived in a pretty how town  
(with up so floating many bells down)  
spring summer autumn winter  
he sang his didn't he danced his did (Cummings 44) ③

この現象を文法規則で説明しようとすれば、文法の中に大きい混乱が生じることになる。Grinder-Elgin はこのような発話の存在を文体部門設定の根拠の一つにしたのであるが、この現象は、前述の重複削除や技巧的削除によるものと性格を異にしている。まず第一に、(6 ii)でのべた入力となるべき表層構造が必ずしも明らかでない。したがって、第二に、(6 iii)であげた文法関係、共起関係の確認が容易でない。第三に、このような表現は、詩、または、その他の集合文体の中に一般的に生じるとはいえない。むしろ個人的な気まぐれといってよいであろう。一般性のないものを規則の形で定めることは無意味であるので、この現象を詩的な文体規則をたてることによって説明するのは賢明でない。ただし、個人文体のレベルで何らかの形式化を行うことは不可能でないかもしれない。

#### 2.1.3.4. 等位構造削除 (Coordinate deletion)

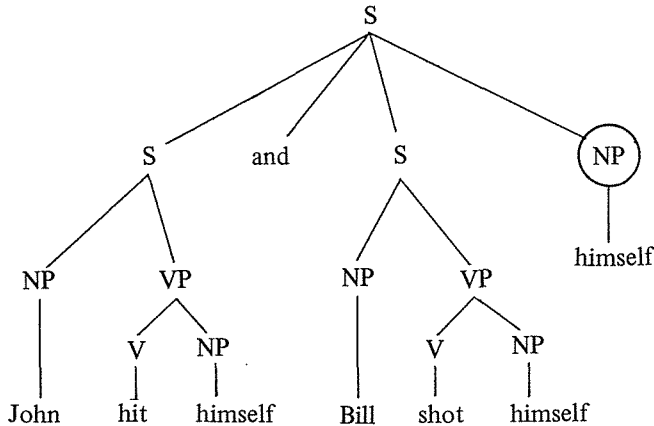
- (10) (i) “Pardon my asking, but was she deeply attached to her husband and he to her?”  
(ABC109)  
(ii) John hit (,) and Bill shot (,) himself. (Banfield 81:15)

等位構造削除は、Banfield(81)で用いられている用語であるが、接続縮約 (Conjunction reduction) と空所化 (Gapping) とを含んでいる。さらに、ここでいう接続縮約は、構成要素性 (constituency) を破るものを指し、そうでないものは文法規則の一つであるとしている。等位構造削除は、いわゆるA-over-A構造を生じずに、単に同一の連続を削除するだけである。Banfield が、この規則を文体的と呼ぶ根拠は、第一に、入力よりも出力の方が容認可能性が低いということ、第二に、この規則は構成要素性を無視しているということである。が、この根拠はそれ程強力なものではない。第一の点は、程度問題であり、(10 ii)については、ある程度認められたとしても、(10 i)の場合は、空所化が適用されない方がむしろ不自然な発話であるともいえよう。第二の点についても、構成要素性を無視したものは文法でまったく扱えないというわけでもない、明白な根拠とはなりえない。たとえば、(10 ii)に対しては(ii)のような構造を考え



ればよい。

(11)



(11)の右上の *himself* を根拠として、下位の2つの *himself* を削除すれば、(10 ii)が生じることになる。しかも、(11)の構造によって、*hit*の後と、*shot*の後に構造上の切れ目があるので、コンマやポーズが入りやすい状況にあることも予測できる。以上の考察から、等位構造削除は、いろいろ問題のある規則ではあるが、これを文体規則と呼ぶ必然性はないように思える。

#### 2.1.3.5. かきまぜ (Scrambling) 規則

かきまぜ規則を文体規則の一つと考える学者は多い。しかし、語順が文法的信号として重要な働きをする現代英語の普通の発話においては、「かきまぜ規則」という名称にふさわしいものは考えられない。しかし、また一方、詩の中にはかなり自由に、文法関係や共起関係が正しく推定できる範囲内において、語順の変更を許すものもある。したがって、ごく限られた詩などにみられる通例の語順を無視した語順変更に限って文体規則という名称を与えてもよいであろう。

小規模な「かきまぜ規則」として、いわゆる移動規約 (Transportability convention) が考えられるが、これまで筆者が行った副詞の移動についての考察から、この規約は、文法的に規定できる制限内における自由を認めるものであるので、文体的とは呼ばない方がよいと思われる。

#### 2.1.3.6. その他

出力規制や表層構造規則は、どちらかといえば、「文体的」な性質をもっている。また、構造保持の原則を守らない現象についても同様のことがいえる。たとえば、後者の場合、主語・助動詞倒置、転位、動詞句前置などは、根変形であるがゆえに、構造保持的でないし、また、移動規約で説明できる副詞の動きは、別の意味で、その原則を破っているといえる。今のところ、これらの現象は文法的に説明できるといってよいと思われるが、すこし先走っていえば、構造保持的でない規則はすべて文体規則であるといえるときがくるかもしれない。

#### 2.1.4. まとめ

言語知識に属する文体規則は、規則それ自体が文体的であり、文法的規則から区別できる明確な特性を備えている必要がある。いいかえれば、その規則を文法の中に入れると、文法内に不都

合を生じるようなものである。本節で文体規則と認められたのは、重複削除、技巧的削除、条件付きで、かきまぜ規則の三つである。

言語知識の一部としての文体論は、むしろ、特殊な文体を扱うものであり、「普通」の発話の対象外となる。別のいい方をすれば、「普通」の発話には文体はないといういい方をせざるをえない。しかし、ちがった観点からすれば、すべての発話には何らかの文体があるという考え方もできるわけである。たとえば、能動文とそれに対応する受動文では文体がちがうといういい方は素人的ではあるが、説明に価する言語的直観の一つであろう。この点については、次節の広義の文体論の中で扱う。

## 2.2. 言語運用の一部としての文体論

Ohmann(64)は、生成変形文法の中で文体論を扱った最初のものといってよく、この点で、まず注目に価する。この論文では、文体は、言語知識の現象ではなく、言語運用の現象であると考えられているといえる。

Ohmannによれば、生成変形文法の変形部門を活用することにより、これまでややもすれば印象的・主観的な分析に終りがちな文体論を、形式的なものにすることができるという。さらに、これまでの分析よりも簡潔な記述がえられ、文学的な作品の批評に対し、これまでよりも適切な根拠を与えている。さて、言語運用の一部としての文体論は、言語知識の記述に依存しているのであるが、この論文は、1964年に出されたものであるから、文法の枠組みとしてはChomsky(57)が用いられていると考えてよい。したがって、Ohmannが、その当時大部分が随意的だとされた変形に文体発生の要因を求めようとしたのは無理のないところであった。

文体発生の変形として変形を考えた根拠としてつぎの三点を上げている。(i)大部分の変形は随意的であり、文の多様性が説明できる。(ii)変形は、構造をもった記号連鎖に適用されるのであり、VPのような範疇に対してではない。したがって、変形関係にある構造は、同一内容のちがった表現とみることができる。(iii)変形は、複雑な文が、どのように派生されるかということ、いいかえれば、簡単な文とどのように関係づけられるかを説明することができる(Ohmann 64:428-429)。さらに、Ohmannは、自分の考え方を例証するために、FaulknerとHemingwayの作品の一部を分析し、それぞれの作家により、用いられている変形の種類に特徴的なちがいがあるとしている。

つぎに、Ohmannのモデルを考慮しながら、言語運用の一部としての文体論について、いくつかの重要な点を検討してみよう。

### 2.2.1. 言語知識の記述法と文体

言語運用の記述は、言語知識のそれに依存するのであるが、後者それ自体が流動的であるために、文体論の方法論も不安定になり、実際の分析を行う際にはかなりの不安がつきまとうのが実情である。事実、Ohmannが依拠したであろうChomsky(57)と、Chomsky(65)とを比較しても、Ohmannの方法論は大きく修正される必要がある。なかでも一番重要な点は、Chomsky(57)で

大部分随意的とされていた変形が、Chomsky(65)では大部分義務的になった点である。これは、変形の引き金(trigger)が書き換え規則の中に大巾に組み込まれた結果である。もっとも、結果として、「変形は意味を変えない」という仮設が導入されたことは Ohmann にとってはよろこばしいことであっただろうが、変形の選択に文体発生の要因を求めるという考え方は修正の必要が生じた。つまり、変形の選択は、大部分、書き替え規則の中の引き金の選択というふうに読み替えられる必要が生じたといえる。Chomsky(57)と Chomsky(65)とを比較しただけでもこれだけ大きい修正が必要になるのであるが、現実には、それ以後、文法記述にさらに大きな変更があるわけで、それに対応する文体研究の方法論の修正が必要とされるのである。

### 2.2.2. 言語知識と言語運用との関係

言語運用の記述は言語知識の記述に依存しているとのべたのであるが、ここでいう「依存」の意味について検討しておく必要がある。本来、両者は、まったくちがった次元に属するもので、言語知識を説明する機構、つまり、文法が、オートマトンとして動き出せば、それが言語運用のモデルであるというような関係ではない。この点で、文法が文を「生成する(generate)」という表現は、文法が、人間が発話を作り出すごとく、発話を生成するのではないかと思わせるふしがあり、誤解を生じやすい。このため、「生成する」という表現の代わりに「列挙する(enumerate)」という表現を用いている文献があるが、これは妥当な処置といえよう。

文法は、変形を含む規則の体系であるとされているが、このことは文法理論上の必要からたてられた仮設で、実際の言語運用に際して、このような体系に対応するものが、心理的実在として、言語使用者の頭の中にあるかどうかは不明である。たとえば、複雑な変形過程の結果生じたと考えられる文が、実際の文処理の際、そうでない文よりも多くの処理時間を必要とするとは、かならずしもいえないということがわかってきている。また、解釈規則は、言語運用が「合成による分析」(analysis by synthesis)という方式で行われていると仮定すれば、ある程度の心理的裏付けがあるともいえるが、いまだに結論を出せる状態ではない。

言語知識のモデルは、言語運用の説明に貢献する度合に応じて、その存在理由が与えられるといえる。言語知識の内部だけで妥当と判断される形式化があっても、言語運用の説明に役立たなければ、再検討が必要となろう。たとえば、かなり古い例ではあるが、Hasegawa(67)は、受動文をいわゆる補文構造を含む構造の一つとみなすという当時としては斬新な提案を示しているが、このような新しい提案が、これまでの伝統的な分析法よりも優れていると評価されるためには、単に言語知識面での理論的妥当性ばかりでなく、文処理を含む心理的な考察の裏付けが必要とされよう。

結論として、言語知識のモデルの妥当性は、言語運用の説明にどの程度貢献するかによって決まることになるが、逆に、実際の手順を考えてみると、言語知識のモデルがなければ、言語運用の説明は始まらないといえる。つまり、運用面で選択可能な範囲は、言語知識のモデルで捉えられたものであるからである。この意味で、言語運用の研究は言語知識のモデルに依存しているこ

となる。

### 2.2.3. データの扱い方

言語運用の一部としての文体論の場合、言語知識のモデルとちがって、経験的にえられるデータが重要である。しかも、そのデータは、説明的に理論を作り出すのに役立ち、また、検証可能なものでなければならない。Ohmannの具体的な分析は、断片的ではあるが、HemingwayとFaulknerの文章について行われており、両者の文体上のちがいの一部は、それらの文を派生する際に適用された変形の種類のちがいに帰せられている。この論文の性格からすれば、このようなデータの扱いは容認できなくもないが、さらに厳密な文体研究を行うためには、文体決定のさらに多くの要因を発見すると同時に、統計的な処理が必要となろう。言語知識——possibility——の面では、原理的には、“Yes or No”で答えが出るはずであるが、言語運用——probability——の面では、連続した数値で答えが出されることになる。また、言語知識の面の研究では、資料提供者の数が限定され、ひどい場合には、文法家が自分自身の直観に頼って記述を行っていることが多いが、言語運用面では、資料提供者の反応をできるだけ客観的に集める必要がある。たとえば、HemingwayとFaulknerのように文体的な差が大きいデータの場合は、一見問題はないように見えるかもしれないが、もし、類似した文体の差を検討するとすれば、その差が統計的に有意味であるかないかが大きい問題となる。

特殊な文体を生じるような表現は、その場において選択可能な表現のうち、probabilityの低いものをあえて選択した結果であり、いいかえれば、文体的に有標(marked)のものを選択したことになる。これに対して、選択されるprobabilityの高いものを選んだときは、無標(unmarked)のものを選択したことになり、「正常な」、「陳腐な」、「新鮮さのない」印象を与えることになる。有標、無標の区別は、時代により、人により、場所によりちがいがあり、簡単には決められないものであるが、このprobabilityの濃淡の差は“Yes or No”で判定できるものではない。

### 2.2.4. 言語運用面に属する文体の実例

言語運用面に属する文体論からすれば、すべての発話には文体があるということになる。いわゆる文体規則が適用されてもされなくとも、対応する二つ、または、それ以上の表現の間に文体的なちがいが感じられる。書き替え規則、変形規則の区別なく、ある規則が随意的であれば、その入力も出力もともに文法的であるはずであるが、両者の間には文体的なちがいが感じられることが多い。このような意味での文体の認識は、Ohmann(64)をはじめ、Katz(72)、Taylor(80)などにもみられる。

文体規則が選択適用された実例はすでに上げたので、ここでは、文法規則の選択によって生じた文体的ちがいを示す例を上げることにする。

- (12) (i) Hercule Poirot slowly nodded his head. (NIL148)
- (ii) Hercule Poirot nodded his head slowly.

- (13) (i) Kept herself to herself, Mrs. Ascher had. (ABC35)
- (ii) Mrs. Ascher had kept herself to herself.
- (14) (i) But out she goes. (ABC 112)
- (ii) But she goes out.
- (15) (i) And this insult to my profession I will not forget. (NIL167)
- (ii) And I will not forget this insult to my profession.
- (16) (i) He thought she had made him lie.
- (ii) He thought, “she has made me lie”. (Ohmann 64:435)
- (17) (i) The coat was burned by the man in the green hat.
- (ii) The man in the green hat burned the coat.

(Katz 72: 421)

いずれも(i)と(ii)の間には文体的ちがいが感じられる。(12)における *slowly* の動きは、すでに言及した移動規約で説明できるものである。移動を引き起こす引き金もないし、構造の変更もない。(13)~(15)でも、引き金はないが、それぞれの(i)の方にみられる前置された構成要素がチョムスキー付加をしていると解釈する場合は、構造上の変更を引き起こしたことになる。(16)では、話法の変換が生じている。(17)には、(12)~(16)とちがって、規則適用の引き金があり、また、構造上の変更がある。いずれにしても、(i)と(ii)の間に文体上のちがいがあるとすれば、それは、両者の間に介在する変形によるものであるといえる。文体規則も含めて一般的に規則の適用の結果生じる文体的差は、言語運用に属するものと考えられる。

上にあげた例では、選択の可能性の範囲が、通例の変形で説明できるものに限られ、議論が単純化されている。しかし、実際の発話を観察してみると、さらに広い選択の範囲が必要であることがわかる。

- (18) (i) After dinner, the senator made a speech.
- (ii) When dinner was over, the senator made a speech.
- (iii) The senator made a post-prandial oration.
- (iv) The termination of dinner brought a speech from the senator.

(Ohmann 64:427)

たとえば、(18 i)と(18 ii)との関係は、文法的に説明不可能ではないといえるかもしれないが、(18 i)と(18 iii)や(18 iv)との関係になると、文法はほとんど無力であるといわざるをえない。しかし、実際の発話では、このような選択の範囲はかならずしも異常なものではない。したがって、文法の枠内で、まず、選択の可能性を追求するのは現実的ではあるが、その後さらに大きい仕事があるということに留意すべきであろう。

### 3. 結論

言語知識のモデルは、“idealized speaker-hearer”が作り出す、また、解釈するすべての可能な文を、文脈や場から切り離して、無作為に(at random) 列挙する。一方、言語運用の面では、言語使用者は、列挙しうるすべての可能な文の中から、自分の意図や意味にふさわしい、また、文脈や場に適した唯一の表現を選択し、同時に、他の言語使用者が選択した表現を解釈する。

文体論は、この二つの面から考察することができる。

まず、言語知識に属する文体論では、文体部門が設定され、その中に可能な規則の一つとして文体規則がおかれる。本稿では、重複削除、技巧的削除、条件付きで、かきまぜ規則が、それぞれ文体規則と認められた。ただし、これらの規則は、いづれも可能な規則の一つにすぎないのであって、それが選択使用されるかされないかは、言語運用の問題である。

つぎに、言語運用に属する文体論では、文法的規則であれ文体的規則であれ、書き替え規則であれ変形規則であれ、随意的なすべての規則の選択・不選択が文体発生の要因となる。この種の選択のパターンは、“Yes or No”で答えが出るものではなく、いわば Probability Model で記述されるべきものであろう。

注

- ① 「英語青年」(研究社)1971年3月号878-879.
- ② Fromkin(68)48.
- ③ 略符号を用いている資料については文献一覧を参照のこと。略符号の後の数字はページ。

## BIBLIOGRAPHY

- Banfield, Ann (81): “Stylistic deletion in coordinate structures” *LA* 7, 1, 1-32.  
 Chomsky, Noam (57): *Syntactic Structures* Mouton.  
     (65): *Aspects of the Theory of Syntax* MIT.  
     (80): “On binding” *LI* 11, 1, 1-46.  
 Chomsky, Noam and Howard Lasnik (77): “Filters and control” *LI* 8, 3, 425-504.  
 Emonds, Joseph E. (76): *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations* Academic Press.  
 Fromkin, Victoria (68): “Speculations on performance models” *JL* 4, 1, 47-68.  
 Grinder, John T. and Suzette Haden Elgin (73): *Guide to Transformational Grammar* Holt, Rinehart & Winston.  
 Hasegawa, Kinsuke (67): “The passive construction in English” *Lg.* 44, 1, 230-43.  
 Katz, Jerrold J. (72): *Semantic Theory* Harper & Row.  
 Ohmann, Richard (64): “Generative grammars and the concept of literary style” *Word* 20, 3, 423-39.  
 Ross, John Robert (67): *Constraints on Variables in Syntax* Unpublished Ph. D dissertation, MIT.  
 Taylor, Talbot J. (80): *Linguistic Theory and Structural Stylistics* Pergamon Press.

Source of Data:

- ABC: Christie, Agatha: *The ABC Murders* Collins.  
 Cummings: Cummings, E.E.: *Selected Poems 1923-1958* Penguin.  
 NIL: Christie, Agatha: *Death on the Nile* Collins.